

## ループスアンチコアグラントの検出に APTT 凝固波形解析が有用であった一例(第3報)

◎萱場 理恵<sup>1)</sup>、関 恵理奈<sup>1)</sup>、柴井 崇史<sup>1)</sup>、谷渕 将規<sup>1)</sup>、中野 翔太<sup>1)</sup>、深澤 邦俊<sup>1)</sup>、海老澤 和俊<sup>1)</sup>、竹内 隆浩<sup>1)</sup>  
静岡済生会総合病院<sup>1)</sup>

【はじめに】ループスアンチコアグラント (lupus anticoagulant: LA) は「個々の凝固因子活性を阻害することなくリン脂質依存性の血液凝固反応を阻害する免疫グロブリン」と定義され、リン脂質依存性の凝固反応で検出される。それゆえに、LA 陽性検体は活性化部分トロンボプラスチン時間 (APTT) 単独延長となり、APTT の凝固波形解析 (clot waveform analysis: CWA) では波形異常が検出される。今回、我々は 第3報目となる APTT の CWA から LA の存在を早期に疑い、実際に LA を同定しえた男児を経験した。

【症例】6歳男児。当院耳鼻咽喉科にて睡眠時無呼吸症候群疑いで全身麻酔下口蓋扁桃摘出術の術前採血にて APTT 単独延長を認めたため先天性血友病や抗リン脂質抗体症候群を疑い当院血液内科へ紹介受診となった。

【血液検査所見】血算は、白血球数  $7.37 \times 10^9/L$ 、Hb 13.8g/dL、血小板数  $399 \times 10^9/L$  であった。凝固検査は、PT13.5秒、APTT 84.0秒、Fib 424mg/dL、FDP 2.5 $\mu$ g/mL 以下、Dダイマー 0.5 $\mu$ g/mL 以下と APTT の高度の延長を認めた。CWA は、ショルダー様でピークから軽度膨らみをもって下降した。APTT クロスミキシング試験は即時と遅延とも

に直線状であった。凝固第VIII因子活性 89%、凝固第IX因子活性 67%、フォン・ウィルブランド因子活性 98%であり、LA は希釈ラッセル蛇毒時間法で 1.4、リン脂質中和法で 1.99 であった。

【経過】血栓症の既往はなく、抗リン脂質抗体症候群の診断基準は満たさなかった。APTT 延長は LA によるものと結論づけられ、予定通り後日手術予定となった。

【考察・まとめ】男児の APTT 延長では先天性血友病の他、抗リン脂質抗体症候群も重要だがいずれも診断確定には数日を要する。また、スクリーニング検査として有用なクロスミキシング試験は遅延型の判定は2時間後である。LA を有する患者では、LA が APTT の増加を引き起こし、波形が歪む可能性があるという報告がある。本例も軽微だがショルダー様の波形を認めたため APTT 時間の確認と同時に LA の存在を早期に疑い、迅速な確定診断に至ることができた。今後も CWA を臨床へ認知してもらえるよう努めると同時に APTT 延長症例における CWA データの蓄積と臨床に寄与するデータ解析が望まれる。連絡先：054-285-6171 (内線 2534)